漫画から卒業したのかな

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）

前回、読書の秋にちなんで私の読書歴や、自分なりの活用法などを紹介しました。今回はそれらの中で言及できなかった、「漫画」について書きたいと思います。

今や、様々なハウツーものや学習資料までもが漫画化されるのが当り前の時代ですが、30年ほど前までは「漫画ばかり読んでいると、頭が悪くなる」という認識が一般的でした。昭和の頃は、TV番組でコメンテーターが「電車の中で漫画雑誌を読むサラリーマンが増えて、嘆かわしい」などと否定的なコメントをしている場面もよく見られ、私も親から「漫画ばっかり読んじゃだめ！」と、たびたび注意されていました。

実は、子どもの頃から本を読むのが大好きだった私は、漫画も沢山読んでいたのです。祖父が書店を経営していたため、遊びに行けば自由にそれらを読むことができたのも、拍車をかけました。祖父の書店では「貸本」と呼ばれる漫画のレンタルもやっており、そうした漫画本には「貸本作家」と呼ばれる専業の方もいたように、独特の作風というかジャンルがありました。当時、特に人気が高く一番数も多かったのは「ホラーもの」。例えば死者が蘇って呪いをかけたり、人間の内臓で楽器を作るコレクターが襲って来たり…などなど、私も色々と読んではゾッとしたりしていましたね。

その後、高校生ぐらいまで夢中になったのは「フレンド」「りぼん」などの少女漫画でした。私は中学校からずっと女子校に通っていた上に、同年代の男子と知り合ったり交流を持つ機会が全くといっていいほどなかったため、いわゆる「男女交際」に関する情報は、ほとんど少女漫画から得ていたと言っていいでしょう。今思えば情けない限りですが、例えば「登校時にトラブルになった男子が同じクラスの転校生で、ケンカをしながらも引かれ合っていく」とか「幼なじみの男子から友人の女子に好意を寄せていると相談され、実は自分も彼を好きだったことに気付く」などなど、今ではお笑いのネタにされるようなストーリーも、当時は「フムフム」と真面目に読み込んだり、シーンを想像したりしていたのです。

そうした「勉強」がその後の人生で役に立ったかは……いつか違う機会に書くとしまして、学生時代には他に少年漫画誌など幅広いジャンルの漫画を読んでいたものの、社会人になって以降は、ほとんどそれらに触れなくなってしまいました。当時は既にパチンコに夢中だったこともあったかもしれませんが、現在に至るまで漫画本関係を購入した記憶もあまりないのです。強いて言えば、パチンコやパチスロ関連の漫画雑誌で仕事をしていた関係から、それらを多少読んだことがある程度で、基本的に今は全く読まないですね。

その理由は自分でも分からないのですが、興味がなく買ったりするのももったいないと感じる…つまり「卒業」してしまったのかもしれません。

ただ、最近のパチンコでは人気漫画をテーマにすることも少なくないため、そうした機種の記事を書いたりする際若干困ることがあるのも事実。どうやら漫画は現在の私を作って来た一部であることは間違いないものの、現在は仕事上の必要資料の一部という、ドライな関係になってしまっているようです。自分の価値観では「漫画より活字の本の方が遥かに興味深い」ので、やはりより想像力が働かせられる方が好みなのかもしれないな、と思います。